

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 研究成果報告書

研究テーマ情報

プログラム名	学術知共創プログラム
課題	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
研究テーマ名	よりよいスマート WE を目指して:東アジア人文社会知から価値多層社会へ
研究代表者所属研究 機関・部局・職	京都大学 大学院文学研究科 教授
研究代表者名	出口 康夫

研究費（直接経費）（千円）

令和 4 年度 (2022 年度)	令和 5 年度 (2023 年度)	令和 6 年度 (2024 年度)	令和 7 年度 (2025 年度)	令和 8 年度 (2026 年度)	令和 9 年度 (2027 年度)	合計
14,700	14,700	14,700				44,100

研究の概要（0.5 頁以内）

本報告書「1. 研究の目的・意義」、「2. 研究内容・方法」、「3. 研究の成果及び波及効果」に記述した内容について、その概要を簡潔に 0.5 頁以内で記述すること。

本研究は、急速に進展するスマート化・DX 化の社会的影響、とりわけ人間関係の希薄化や共同体意識の衰退といった「WE 問題」に応答するための、人文学・社会科学からの新たな視座と実践の提案を目的とするものである。従来の西洋近代的な自律的個人観や自己決定を中心とする価値観に対し、東アジア思想を批判的に継承・再構成することで、関係性を基盤とする「WE ターン」という新たな倫理的主体モデルを構想し、スマート技術の導入と共に現れる倫理的課題に対する応答可能性を探った。

本研究では、(1) 価値観の多層化、(2) 学の実践的統合、(3) 理念から具体策までを一貫する通貫的アプローチ、(4) 哲学・工学・企業・地域・国際の五領域から構成される 5 次元共創体制の構築、という 4 つの柱に基づいて研究を推進した。京都大学の共創空間「ぶんこも」におけるスマートサイネージを活用した予備的実験により、技術を介した人的交流の可能性を試行しつつ、小田急沿線や越前市における合意形成・交流支援の実証に向けた準備も進めている。また、コミュニティ内のコミュニケーションの質を測定する新指標「Mixbiotic society measures」を開発し、孤立化・群衆化・混生といった社会構造の把握と評価を可能とした。

こうした取り組みを通じて、抽象的理念にとどまらず、技術と人文学の連携による実践的課題解決の道筋を提示し、未来社会における倫理的応答の枠組み構築に寄与することができた。

1. 研究の目的・意義（1頁以内）

応募内容提案書に記載した研究の目的・意義について、課題の内容に照らした問題意識、その課題との関連性並びに人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追究する意義を明確にした上で、具体的かつ明確に1頁以内で記述すること。

現在国内外で生活空間のスマート化・DX化が急速に推し進められ、社会に正負様々な影響を及ぼし始めている。中でも本研究はリアルとバーチャルなWE（人間関係・絆・共同体）の貧困化というWE問題に焦点を当て逆にWEを再活性化するスマート化・DX化の処方箋を描く。

ここで言うWE問題とは、正確には、いかにしてリアルな生活環境での人々の絆の弱体化・人間関係の希薄化とバーチャル空間におけるスマートモビズム（群衆化）の蔓延（ヘイトトークの跋扈・フェイクニュースへの脆弱性）を防ぎ、リアルなWEを豊穡化しバーチャルなWEを健全化すべきかという課題である。本プロジェクトは人間・社会観の人文学的深掘りと文理・産官学連携による実証研究を密接に連関させることで、この課題に答える。

WE問題の一因は、人間を「できる存在」とし、その本質・尊厳を自律性や自己決定性に置くカント的人間観、そのような個人の「できること（能力・機能）」の最大化を目指すヘーゲルの社会観に代表される西洋近代の価値観にあると本課題は見る。このような考えでは、コミュニティの重要性が強調される場合でも、常にそれに先立って自足的・自立的に存在する「WEなしに一人で生きていける個人」が想定され、そのような裸の私を利益の中心に据え続ける私中心的WEが想定されている。このような価値観は20世紀を通じてグローバル・デファクトスタンダード化し世界人権宣言やSDGs等に見られるように国際的な公式見解とされている。

このような自足的個人の神話は、個人の能力の「エンハンスメント・エンパワーメント（機能強化）」というスマート化の謳い文句によってさらに増幅されつつあるが、この神話の増悪化は以下二つの現象において集約的に看取できる。(1)スマートアトミズム：インターネット個人端末によって社会的に自然な分子状態（WE）から切り離され、「私」という遊離原子化された個人が、リアルなWEの重要性・必要性を過小評価しつつ、バーチャル空間に投げ入れられているという事態。(2)肥大主人化：スマート化の一環として、自律性のみならず、人格を持つかのように振る舞う動作性、即ち「e-人格性」も持つ（AI・ロボット・デジタルツイン等の）人工物（「e-ひと」）が社会実装されつつある。欧州では、個人の自足性を重視するあまり、このような「e-ひと」を「奴隷（所有物）」視する見方が示されている。裏返せば、常に複数の「奴隷」に従えた「過剰に自尊化し肥大化した主人」という個人像が提案されているのである。結局スマート化によって、肥大化した原子という個人観が社会に浸透しつつあることで、上のWE問題が惹起されているのである。

このような流れに抗して、本プロジェクトでは、東アジアなど非西洋の思想伝統に注目し、そこから「できなさ」を基軸とする人間観や（私を含め）どのような個人をも中心に据えない脱私中心的WE観、さらには非自足的な者同士の相互委譲のネットワークとしての社会観などのオルタナティブな人間・社会観を析出することで、スマート化によって増悪した西洋的人間・社会観を非自明化・相対化・問題化すると共に、そのオルタナ価値観に基づいたWE問題の解決策を提案する。具体的には、(1)スマートモビズムを回避するため、「単なる見物者としてのWE」ではなく、合意し行動するWE（WEアクター）をリアルとバーチャルを貫いて再確保することを目指し、「e-ひと」をファシリテータとする合意形成支援ツールを用いて、福井県越前市をフィールドとする実証実験を行う。(2)（固定的で閉じたWEではなく）流動的で開かれたWE（モバイルWE）のリアル世界での再活性化を志向し、小田急が沿線に実験的に設置する人流滞留スポット（溜まり場）を舞台として、「e-ひと」をメディアータとする人的交流支援ツールの効果実証を行う。(3)これらの実証実験を通じて、「e-ひと」と人間との関係性に関して「主人-奴隷」モデルとは一線を画すフェロウシップ（対等的仲間性）に基づいた新たなモデルを提案する。

2. 研究内容・方法（1頁以内）

応募内容提案書に記載した研究計画について、本プログラムの趣旨及び課題の内容を念頭に置いて、何を、どのような方法を用いて、研究期間内にどこまで明らかにしようとしたのか、具体的かつ明確に1頁以内で記述すること。なお、研究の進捗に応じ応募内容提案書から変更した部分があれば理由とともに明記すること。

本研究は人文社会学の根源的・原理的問題に関するブレークスルー、具体的には東アジアを中心とするアジアからのオルタナティブの構築による人間観・社会観の脱西洋一極化・多層化とスマート化・DX化が齎すWE問題という現代的課題の解決策の提示を相互反照的に遂行する新たな人文社会学のパラダイムを学界と社会に発信するため、以下のような方略を採用する。

1) **価値観の多層化**：同じ思想伝統に留まる限り「人間とは何か」「どのような社会を作るべきか」といった人文社会知の最大級の問題に関わるブレークスルーは困難である。そのため本研究は現代知の主流である西洋近現代思想とは一線を画す（東）**アジアの価値観**を参照し上記の問題に対する**ビッグオルタナティブ**を探る。だがこれは（東）アジア的伝統の無批判な継承を意味しない。本プロジェクトは（東）アジア思想を21世紀の人類的価値観へと鍛え上げることを目指すのである。また現実の社会は一枚岩ではなく多様な価値観が積み重なった多層体でもある。そこで本研究も、西洋思想を安易に否定しアジア思想を称揚する「あれかこれか」式の二者択一は避け、価値観の選択肢の豊穡化を通じて、価値観が多層的に共存している**価値多層的社会**の実現を目指す。

2) **学の実践的統合**：事実の記述・説明を目指す自然科学と異なり人文社会学は**価値の提案の学**である。だが近年人文社会学も通常科学化が進み、蛸壺的細分化と価値提案力の減退に見舞われている。これに対し本研究は、WE問題の解決という複数の領域の共同作業が不可避となる多面的な社会課題と向き合うことで人文学本来の分野の壁を超えた価値提案力を取り戻す。

3) **理念から具体策までの通貫的アプローチ**：本研究は、WE問題を軸に、新たなオルタナ価値観の提示という普遍的な理念的次元から、課題解決のための具体的ツールの実証という現実に着した次元までを一気に通貫する**ワンストップの提案**を行う。そのため本研究はWE問題の発生現場を(1)バーチャル空間における「無責任な見物者としてのWE」の過剰繁茂と「責任を持った合意・行為者としてのWEアクター」の稀少化、(2)リモートワーク・eコマースの浸透によるリアルな人流とそれに伴う人的交流の貧弱化という二局面に絞り、それぞれに即して、**WEのよりよいスマート化**に資するためのスマートツールの用途を考案し、その効果の検証実験を、越前市と小田急沿線という具体的なフィールドを確保して実施する。その際、本研究では、人間の所有物としての「奴隷」ないし「召使い」としての「e-ひと」（e-奴隷）ではなく、共にリスクを背負いあう「共冒険者」としての動作性を付与された「e-ひと」（e-共冒険者）こそが、リアルとバーチャルなWEの活性化により貢献するという作業仮説を設定し、その実証を目指す。

4) **5次元共創体制の構築**：本研究では以下のような多様なバックグラウンドを持った参加者が結集するプロジェクト体制を構築する。(1)哲学・倫理学・法学を中心とする**アカデミアの人文社会学者**、(2)情報工学等を研究する**アカデミアの自然科学者**、(3)日立京大ラボ・小田急を始めとするスマート化・DX化を推進する**企業研究者**、(4)福井県越前市・小田急沿線などの**地域住民・NPO・自治体**からなる現場のステークホルダー、(5)東アジア・東南アジア等**海外の人文社会学者・IT技術者・IT起業家**。

これら多様な参加者間の密接な共創体制を担保・維持するため、本研究では上記5つの次元全てから人材を結集した統括グループを置き、本プロジェクト予算で雇用する准教授クラスの研究者がモデレートする日常的議論を通じて、次元間で異なる語彙・方法論・スタイルの摺り合わせを図る。さらに人文系若手研究者を日立京大ラボに常駐させると共に次元を異にする参加者間の議論のコーディネーター役を果たさせることで、グループ間連携の更なる緊密化と共創的人文学の次代を担う人材の育成をも図る。

各グループのアウトプットとしては、比較WE学Gおよび「e-ひと」Gは英語論文集の刊行、合意形成Gおよび人的交流Gは支援ツールを用いた実証実験の結果公表が計画されている。また全てのグループが関与する成果物としてはオンライン講義やシンポジウムの実施とその書籍化、アジェンダ集「WE-2058」の社会発信が設定されている。

3. 研究の成果及び波及効果（6頁以内）

研究期間内の研究の成果及び波及効果を、以下の点を含めながら、具体的かつ明確に6頁以内で記述すること。

- ・本事業の趣旨及び当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展したか。
- ・具体的な研究成果及びそれらのどのような点が先導的であったか。
- ・未来社会が直面するであろう諸問題に係るどのような応答を研究成果として提示できたか。
- ・人文学・社会科学と自然科学の双方に学術的視野の広がりをもつ人材の育成にどのように寄与したか。
- ・研究成果をどのように公開・普及させたか。
- ・研究成果及びその普及によって、学術や社会の発展へどのように寄与したか。
- ・研究成果の発表・発信状況。（主な学術論文、学会発表、著書、産業財産権、招待講演、ホームページ、主催シンポジウム、一般向けのアウトリーチ活動等。ただし本報告書提出までに掲載等が確定しているものに限る。なお e-Rad に入力した分はここに記載する必要はない。）

（1）研究の進展状況と当初の研究目的との整合性

本研究では、以下の4つの柱に基づき、現代社会が直面するスマート化と倫理の課題に対して、多層的・学際的にアプローチした。

【1）価値観の多層化】

本研究は、「西洋思想 vs 東洋思想」という二項対立ではなく、東アジア的伝統を批判的に継承・再構成することで、現代に通用する新たな人間観・社会観の構築を試みた。その中核には、「WE ターン」という関係性に基づいた倫理的主体系の提案があり、西洋的個人主義モデルとは異なる視点から、スマート社会における倫理的実践の可能性を拡張した。研究成果は、協同組合やプラットフォーム経済を東アジア思想的視座から捉え直す複数の論考（例：加藤 2025）に反映され、グローバル資本主義のオルタナティブ構想に寄与した。

【2）学の実践的統合】

哲学・倫理学といった人文学的理論研究と、情報工学・都市計画・社会調査といった実証系領域との連携により、「スマート化の倫理的含意」という具体的かつ実践的問題に対し、分析と提案の双方を行った。ぶんこもでのサイネージ活用や合意形成ツールの評価などを通じて、現場の社会課題に応答可能な人文学の機能を再定位し、学の通常科学化・細分化傾向への批判的応答を行った。

【3）理念から具体策までの通貫的アプローチ】

WE 問題を軸に、「無責任な見物者的 WE」と「責任ある行為主体的 WE」との対比を理論的に整理し、前者の傾向が強まりつつある現代社会において、後者をいかに創出・支援するかを問いとした。ぶんこもでのスマートサイネージ実験、越前市でのアンケート・対話実験、小田急沿線での設置準備等を通じ、「関係性の構築」を促す情報技術の社会実装可能性を評価した。これらの成果は、理念の抽象性にとどまらず、フィールド実験との往還によって具体策として提示された。

【4）5次元共創体制の構築】

本研究は、哲学・工学・企業・地域・国際の5領域から成る共創体制を通じ、学際的・実践的議論の実装に成功した。特に、人文学研究者が企業現場（日立京大ラボ）に常駐し、スマート技術の開発現場と連携する体制は、異例かつ先進的である。この体制の下、定期的にオンライン・対面の研究会や報告会を開催し、分野横断的な語彙と目的のすり合わせを図った。これにより、領域を越えた連携と若手研究者の実践的育成が達成された。

以上、4つの柱に基づいた進捗により、当初掲げた人文学・社会科学の枠組みを刷新し、スマート社会における倫理的応答可能性を大きく拡張することができた。本研究は、東アジア的価値観の再検討とスマート化・DX化がもたらす WE 問題への応答を両輪とし、学際的な

観点から新たな人間観と社会像の構築に取り組んできた。研究期間中には、京都大学の施設「ぶんこも」を用いたサイネージ実験や、越前市・小田急沿線での合意形成・交流実験の準備と試行が行われ、当初の研究目的に沿って着実に進展した。

（２）具体的な研究成果と先導性

- ① コミュニティのスマート化に伴う倫理的・社会的課題の構造化：デジタルサイネージ設置による公共空間変容、合意形成手続における公正性・納得感、産官学連携における動機の差異が生む価値摩擦等を整理し、それらの複合的関係を構造的に分析した。
- ② 関係の自己理解の提唱：「WE ターン」という新たな人間観を軸に、自己を他者との関係性から捉え直す枠組みを提示し、哲学的理論の深化とともに実践的なツール開発とフィールド実験に結び付けた。
- ③ Mixbiotic society measures の開発：コミュニティ内のコミュニケーションの質を「混生」「孤立化」「群衆化」「虚無」の四分類で測定する新指標を開発し、スマート化の影響を定量的に把握するための手法を提示した。

（３）未来社会への応答

現代および未来社会において不可避となるバーチャル化・自動化の進展に対応し、孤立化や非人格的な関係が加速するなかで、「関係性」に根ざした倫理的自己像の提案と、それに基づく空間設計・合意形成支援ツールの開発を行った。これは、スマート技術に依拠したコミュニティ再編に対する倫理的基盤の確立として先導的である。

（４）学際的人材育成への寄与

「ぶんこも」や日立京大ラボ等を拠点に、多様な領域の研究者が共同で作業を行い、若手研究者が現場の ELSI 課題に実践的に関与する機会を通じて、学術的視野と社会的応答力を兼ね備えた人材の育成が実現された。特に、哲学・倫理・情報工学・自治体・企業を横断する協働体制は次世代の人文学実践モデルとなる。

（５）研究成果の公開・普及

- ・国内外の学会・シンポジウムでの発表
- ・一般向け講演（高校・大学・企業）でのアウトリーチ活動
- ・「WE ターン」概念に関する哲学的論文の発表準備と国際誌への投稿
- ・Mixbiotic society measures に関する英語論文（PLoS ONE、arXiv）
- ・プロジェクト Web ページおよびサイネージ等を活用した情報発信

（６）学術・社会への貢献

スマート技術導入に伴う倫理的課題の多層的整理、コミュニティの質的評価指標の開発、関係性に根ざした新しい自己観の提案は、学術的に独自性が高く、社会的にも応用可能性の高い成果となった。また、スマート化と倫理的応答の両立に向けて、技術と人文学が協働できる基盤を構築した。

（７）発表・発信実績

論文

1. Kato T. WE economy: Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability. PLoS ONE 19(5): e0301928. 2024. 5. 16. 査読有. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0301928>
2. Kato T, Hoque MR. Wealth inequality and utility: Effect evaluation of redistribution and consumption morals using macro-econophysical coupled approach. arXiv:2405.13341. 2024. 5. 22. 査読無. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2405.13341>（論文投稿準備中）

3. 加藤猛、出口康夫、広井良典. WE 協同企業体の構想-モンドラゴンから WE ターンへ-. 京都大学学術情報リポジトリ. 2024.12.11. 査読無. <http://hdl.handle.net/2433/290881> (論文投稿準備中)
4. 加藤猛. 「委員会の論理」から「WE の論理」へ-資本主義のオルタナティブとしての協同プラットフォーム-. 京都大学学術情報リポジトリ. 2025. 2. 28. 査読無. <http://hdl.handle.net/2433/292251>
5. 高萩智也、「「信頼できる AI」をめぐる論争のこれまでとこれから」、『国際哲学研究』編集委員会、『国際哲学研究』第 12 号、59-71 頁、2025 年、査読あり。

学会

1. Murakami, Yuko (Rikkyo U, Japan), "Epistemic injustice and algorithmic bias", *International Conference, Trajectories of Epistemic Injustice: Local and Global Perspectives*, December 7, 2024, 東京大学鉄門臨床講堂. <https://sites.google.com/view/eiconferenceinjapan/home>
2. Sugimoto, Shunsuke, "Can Artificial Intelligence be Your Good Friend?", *We's Discussion on Self-as-We*, Kyoto University, June 17, 2024.
3. Sugimoto, Shunsuke, "What is 'Fairness' in Algorithmic Fairness?", *The 3rd International Conference on the Ethics of Artificial Intelligence*, University of Azores / Online, September 20, 2024.
4. 杉本俊介「Particularism and AI」『Smart WEe-ひと班年度末研究会』（@慶應義塾大学、オーガナイザー：杉本俊介）、2025 年 3 月 6 日。
5. Taguchi, Shigeru, *Primal Subjectivity as Mediation. From a Phenomenological, Enactive, and Tanabeian Perspective*, *International Workshop: "Self and Infinity II"*, April 13, 2024, 京都大学吉田キャンパス.
6. Taguchi, Shigeru, *The Logic of Non-Oppositional Selfhood, The Philosophy in the We Mode: Smart-WE Workshop*, September 10, 2024, Maritime Museum, Käsmu, Estonia.
7. 橘英希・白川晋太郎「大規模言語モデルと哲学者の対話的 WE」『応用哲学会第 16 回年次研究大会』、2024 年 6 月 1 日、オンライン。
8. 高萩智也「〈e トラスト〉をめぐる倫理的問題」『応用哲学会第 16 次年次研究大会』（ワークショップ：「ひと」と「e-ひと (e-person)」は WE を築けるか）、2024 年 6 月、オンライン。
9. Kazuhiro Watanabe, *Scientific Empiricism Gets Closer to Buddhism in the Depth of Malady and Mindfulness-Shoma Morita and David Hume*, the European Network of Japanese Philosophy 8th Annual Conference, 2024. 9. 8, Tallinn University

アウトリーチ

1. 村上祐子 AI 時代のメディアの可能性と課題 NHK 文研フォーラム 2025 2025. 3. 19 NHK 放送文化研究所
2. 村上祐子 「生成型 AI とその社会に与える影響などについて」2024 年 5 月 25 日 日本アスペン研究所 クロスウェーブ府中
3. 杉本俊介「ビジネス倫理から見たデータ倫理」、MyData Japan 2024、セッション「〈倫理 (エシックス)〉を乗り越なす：データ時代の倫理を実装する」、一橋講堂、2024 年 7 月 17 日。

ワークショップ

1. Ethics of WE
日時：2025 年 3 月 14 日 (金)

開催形式：京都大学／ハイブリッド開催

2. e-ひと班年度末研究会

日時：2025 年 3 月 6 日（木）13:30-16:30

開催形式：慶應義塾大学日吉キャンパス／ハイブリッド開催

4. 今後の展望（2頁以内）

研究期間終了後、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追究する研究をどのように推進し、未来社会が直面するであろう諸問題に係るどのような有意義な応答を社会に提示することを目指すか、具体的かつ明確に2頁以内に記述すること。

本研究では、スマート化・DX化が進展する現代社会における倫理的課題に応答するため、「関係性に根ざした自己理解（WE ターン）」の理論的構築、およびそれを支える実証的・実装的アプローチを展開してきた。今後は、こうした成果をさらに深化・拡張し、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを、以下の方向で追究していく予定である。

1. オルタナティブな人間観の理論的深化と哲学的再定式化

現代社会における自己理解は、依然として「孤立した自律的個人」を前提とした枠組みに支配されている。だが、AIの社会的浸透、リモート社会の拡大、デジタル・プラットフォームの制度化などを背景に、「他者と共にある自己（Self-as-We）」という理解の重要性が増している。今後は、「関係的自己」や「共創的主体性」といった概念の哲学的基礎付けをさらに進め、従来の自由、責任、行為の概念を再構成することによって、倫理学・政治哲学・法哲学の横断的再構築を目指す。

この際、東アジア的思考（儒教的相互関係、仏教的無我論など）と西洋の哲学的資源（行為者性、実践的自己理解、公共性など）を対話的に結びつけ、価値観の多層的共存を前提とした新しい倫理的理論の構築に取り組む。

2. 人文学とテクノロジーの協働による社会的応答の実装

哲学・倫理学が理論的に打ち立てた「共冒険者としてのe-ひと」や「共創的合意形成」の概念を、技術的なアプリケーション（合意形成支援ツール、インタラクティブ・サイネージ、AI対話型支援システム等）として実装し、スマート技術が単なる効率化ではなく、共同性・相互信頼の促進に寄与する設計原理を提示することが、人文学の次なる役割である。

この目的のためには、引き続き自然科学・情報科学との対話を深めつつ、人文学者自身が実験設計・分析に参画し、ELSIを超えた「設計段階からの共創倫理」の体现を進める。

3. 社会実装から公共哲学へ：制度・政策への理論的介入

「スマート化の倫理」という問いは、実は技術の問題ではなく、社会制度や市民の関係構造の問題である。今後は、越前市や小田急との共同研究を通じて、地域社会での政策決定・サービス設計に「関係的倫理」や「参加型合意形成」の観点を組み込む実践を深化させ、哲学的知見を制度設計に反映する「公共哲学」として展開していく。

たとえば、地域づくり・都市設計・エネルギー政策などにおいて、「多数決に代わる納得形成の方法」や「孤立と群衆化のあいだにある関係的社会設計」などの具体的提案がなされうる。また、それを支える哲学的理論として、「共感」「相互承認」「共苦」などの再定義も重要な課題となる。

4. 次世代人文学研究者の育成と実践知の体系化

本研究が築いた異分野共創体制を基盤とし、若手研究者に対して、理論・実践・制度を横断する研究経験を提供するプログラムの構築を目指す。人文学研究者が社会に開かれた知の創出者として活動するモデルを可視化し、「現代社会における人文学の居場所」を再構築していくことが最終的な目標である。

5-1. 研究プロジェクトチームの体制（必要頁）

研究期間終了時点の研究プロジェクトチームの体制について記述すること。

研究グループ名：統括 G

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究代表者	出口 康夫	京都大学大学院・文学研究科・教授	研究統括/比較 WE 学 G リーダー/e ひと G・概念分析
分担者	大西 琢朗	京都大学大学院・文学研究科・特定准教授	統括 G 概念分析/人的交流 G リーダー
参画者	水野 弘之	日立製作所・基礎研究センタ・主管研究長	概念分析
参画者	嶺 竜治	日立製作所・日立京大ラボ・ラボ長代行	ケーススタディ
参画者	坂出 健	京都大学公共政策大学院・准教授	概念分析
参画者	稲谷 龍彦	京都大学・大学院法学研究科法学研究科・教授	概念分析
参画者	唐沢 かおり	東京大学人文社会系研究科・教授	社会調査コーディネーター
参画者	大和田 順子	同志社大学総合政策科学研究科・教授	社会調査コーディネーター
参画者	玉澤 春史	京都市立芸術大学・美学研究科・客員研究員	社会調査コーディネーター
参画者	五十嵐 涼介	京都大学成長戦略本部・特定准教授	事務局長
参画者	高木 俊一	京都大学大学院文学研究科・特定助教	統括補佐・概念分析
参画者	岡村 太郎	京都大学大学院文学研究科・非常勤研究員	統括補佐・概念分析

研究グループ名：比較 WEG

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
参画者	田口茂	北海道大学大学院・文学研究科・教授	概念分析
参画者	三谷尚澄	信州大学人文学部・教授	概念分析
参画者	Akiko Frischhut	上智大学 国際教養学部 国際教養学科 助教	概念分析
参画者	護山真也	信州大学学術研究院人文科学系教授	概念分析
参画者	Jay Garfield	Smith College, Professor	概念分析

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
参画者	佐藤将之	国立台湾大学哲学系 教授	概念分析
参画者	Yumiko Inukai	University of Massachusetts, Boston, Associate Professor	概念分析

研究グループ名：人的交流 G

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
参画者	秋吉亮太	慶応義塾大学	ケーススタディ
参画者	工藤泰幸	日立製作所 日立京大ラボ 主任研究員	ケーススタディ
参画者	村上祐子	立教大学人工知能科学研究科 教授	ケーススタディ

研究グループ名：e ひと G

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
分担者	杉本俊介	慶応義塾大学商学部 准教授	e ひと G グループリーダー
参画者	川口広美	広島大学人間社会科学研究科 准教授	概念分析
参画者	鹿野祐介	大阪大学 CO デザインセンター 特任助教	ケーススタディ
参画者	加藤猛	京都大学オープンイノベーション機構 特定准教授	概念分析
参画者	八木沢敬	カリフォルニア州立大学ノースリッジ校哲学科 教授	概念分析
参画者	白川晋太郎	福井大学教育・人文社会系部門 講師	概念分析
参画者	橘英希	大阪大学基礎工学研究科 特任助教	概念分析

研究グループ名：合意形成 G

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
分担者	神崎宣次	南山大学国際教養学部 教授	G リーダー
参画者	伊藤孝行	京都大学情報学研究科 教授	合意形成システム知見提供
参画者	猪原健弘	東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 教授	合意形成システム知見提供

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
参画者	朝康博	日立製作所 日立京大ラボ 研究員	IT 知見提供
参画者	宮越純一	日立製作所 日立京大ラボ 主任研究員	IT 知見提供
参画者	大輪美沙	日立製作所 日立京大ラボ 主任研究員	IT 知見提供

5-2. 研究プロジェクトチームの役割と連携（1 頁以内）

研究プロジェクトチームにおける個々の研究者や各研究グループ（研究グループを設定している場合）の役割や連携について、図表などを用いて具体的かつ明確に 1 頁以内で記述すること。

本研究プロジェクトは、人文学・社会科学・自然科学の融合に基づき、未来社会における人間観・社会観の刷新と、スマート化がもたらす社会的課題の解決に向けた実践的アプローチを同時に推進するものであり、その目的に資するために、以下の 5 つの研究グループ（G）を設置し、統括グループ（統括 G）が全体の進捗を調整・管理している。

統括 G：

研究代表者である出口康夫（京都大学）を中心とし、各グループリーダーを含む形で編成される。研究全体の理念的方向性を定めるとともに、各グループ間の連携・調整・進捗管理を担う。また、理論・実践両面での成果を統合し、広報・アウトリーチ活動や行政・企業との連携を推進する。

比較 WE 学 G：

アジア思想に精通した国内外の哲学者・倫理学者らを中心に構成され、西洋近代思想と対比する形でアジア的オルタナティブの構築を目指す。特に「WE 概念」の思想的系譜の比較や、自己理解の枠組みの変容に関する理論研究を担う。国際ネットワークの形成や、英語論文集出版などを通じた国際発信も行う。

e-ひと G：

AI やロボティクス等の技術を対象とする哲学・倫理学の観点から、「e-ひと」（e-person）に関する概念の再検討を行い、「e-奴隷」ではなく「共冒険者」としてのあり方を模索する。スマート技術と人間の倫理的関係性のあり方に関する根源的な理論探究と制度設計の検討を並行して行っている。

人的交流 G：

スマートシティやモビリティの実践に携わる企業研究者と哲学・倫理学の研究者が協働し、小田急沿線などをフィールドとして、人流と人的交流の変容に関する調査・実験を推進する。スマート化が人と人との関係性、社会的つながりに及ぼす影響を評価する。

合意形成 G：

AI や合意形成支援ツールの開発者と倫理学・法哲学の研究者が連携し、越前市を主たるフィールドとして実証実験を行う。公共的課題に関する議論や意思決定過程における納得感・公正性・主権者意識の形成過程に焦点を当てる。

これら 5 グループの活動は、上記のように理論的探求と実証的検証に大きく分かれているが、両者は相互に媒介される形で往還的に連携している。たとえば、比較 WE 学 G や e-ひと G で生まれた新たな人間観・社会観に基づき、人的交流 G・合意形成 G では具体的な社会実験を設計・実施しており、理論と実践の接続が本プロジェクトの大きな特徴である。

研究成果報告

年度	2022 年度
配分機関名	独立行政法人日本学術振興会
制度名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
事業名	学術知共創プログラム
公募名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）
課題ID	22679495
課題名	よりよいスマートWEを目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2022 年	査読有無	無
論文課題	「できなさ」からWEターンへ「思想の言葉」				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	思想				
巻	-	掲載ページ (開始)	2	掲載ページ (終了)	4
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2022 年	査読有無	無
論文課題	現前世界としてのメタバース				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	現代思想				
巻	50	掲載ページ (開始)	199	掲載ページ (終了)	208
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2022 年	査読有無	無
論文課題	Self-as-Anything: 道元における自己と世界				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	比較思想研究				
巻	49	掲載ページ (開始)	3	掲載ページ (終了)	10
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)			発行年	2022 年	査読有無	有
論文課題	Logic of Alternative-I						
著者名	Deguchi, Y.; Onishi, T.; Akiyoshi, R.; Yagisawa, T.; Yamamori,						
雑誌名	Asian Journal of Philosophy						
巻	1	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	16		
掲載論文DOI							
その他識別番号							
掲載確定		国際共著		オープン アクセス			
備考	10.1007/s44204-022-00050-2						

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)			発行年	2023 年	査読有無	有
論文課題	Social Co-OS: Cyber-human social co-operating system						
著者名	IET Cyber-Physical Systems: Theory & Applications						
雑誌名	Kato, T.; Kudo, Y.; Miyakoshi, J.; Owa, M.; Asa, Y.; Numata, T.; Mine, R.; Mizuno, H.						
巻	8	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	14		
掲載論文DOI							
その他識別番号							
掲載確定		国際共著		オープン アクセス			
備考	https://doi.org/10.1049/cps2.12037						

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	媒介 が開く知の光景 ラトゥールと田辺哲学と現象学の交叉点				
著者名	田口 茂				
雑誌名	現代思想				
巻	51	掲載ページ (開始)	185	掲載ページ (終了)	193
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	「念慮を透脱する語句」と「メタファー」 「論理空間の外部」に位置する言説をめぐる混交哲学の試み				
著者名	三谷尚澄				
雑誌名	未来哲学				
巻	-	掲載ページ (開始)	231	掲載ページ (終了)	261
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	山はいつでも歩いている 「プラグマティストの形態における表出主義」と道元				
著者名	三谷尚澄				
雑誌名	比較思想研究				
巻	-	掲載ページ (開始)	11	掲載ページ (終了)	18
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2022 年	査読有無	無
論文課題	未来の仏教倫理学のために				
著者名	護山真也				
雑誌名	未来哲学				
巻	-	掲載ページ (開始)	220	掲載ページ (終了)	226
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	色即是空のアポリア 鳩摩羅什と玄奘による『般若心経』の翻訳をめぐって				
著者名	護山真也				
雑誌名	未来哲学				
巻	-	掲載ページ (開始)	57	掲載ページ (終了)	70
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【WEB】

種別	WEB	-	-
タイトル	よりよいスマートWEを目指してー東アジア人文社会知から価値多層社会へー		
URL	https://www.smart-we.bun.kyoto-u.ac.jp/		
備考			

【その他の業績】

その他の業績 (自由記述欄)

○本事業で主催したシンポジウム等 (計7件) うち国際研究集会 計3件

1. 「よりよいスマートWEを目指して」キックオフシンポジウム & ワークショップ (「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」との共催)、大阪大学、参加者数不明、2022. 8. 25
2. 第一回「ヒュームとWE」研究会、Zoom開催、参加者約10名、2022. 9. 22
3. Rein Raud教授講演会、京都大学文学研究科、参加者約10名、2022. 10. 27
4. International Workshop “D gen on WE, I, Self & Other Enigma” (CAPE: 京都大学大学院文学研究科 応用哲学・倫理学教育研究センターとの共催)、京都大学文学研究科、参加者約10名、2022. 12. 5
5. 第二回「ヒュームとWE」研究会、Zoom開催、参加者約10名、2023. 2. 17
6. International Workshop “Toward a Better WE” (JST-RISTEX RInCAプログラム「コミュニティのスマート化がもたらすELSIと四次元共創モデルの実践的検討」との共催)、京都大学楽友会館 (1日目)・奥琵琶湖マキノグランドパークホテル (2日目)、参加者約20名、2023. 2. 21-22
7. International Workshop “Self and Infinity”、Ecole Normale Supérieure, Paris, France、参加者約10名、2023. 3. 20

著作物 (計6件)

1. 出口康夫、共編著、『軍事研究を哲学する-科学技術とデュアルユース』、出口康夫、大庭弘継編、354ページ、「序論：デュアルユースとELSIに取り組む総合知にむけて」、第12章「デュアルユースからミックスドユースへ」、「あとがき」、昭和堂、2022. 8.
2. 三谷尚澄、翻訳、『コスモポリタニズム「違いを越えた交流と対話」の倫理』、クワメ・アンソニー・アッピア著、312ページ、みすず書房、2022. 9. 16.
3. 出口康夫、共著、『危機の時代と田辺哲学 田辺元没後60周年記念論文集』、廖欽彬 河合一樹編、474ページ、「初めからの「実存協同」へ」：第1部「座談会＋総合討議：田辺哲学の現代的意義-コロナ時代に向けて」法政大学出版局、2022. 11.
4. 田口茂、共著、『危機の時代と田辺哲学：田辺元没後60周年記念論集』、廖欽彬 河合一樹編、474ページ、「田辺元の「媒介」概念とそのポテンシャル」、法政大学出版局、2022. 11
5. 村上祐子、共著、出口康夫・大庭弘継編『軍事研究を哲学する：科学技術とデュアルユース』、354ページ、「論理学と軍事」、昭和堂、2022. 8.
6. Murakami, Y., Reconstructing Agency from Choice. pp.125-134 in Masahiro Morioka. (ed.) Artificial Intelligence, Robots, and Philosophy. Journal of Philosophy of Life, 158 pages, 2023. 1.

研究成果報告

年度	2023 年度
配分機関名	独立行政法人日本学術振興会
制度名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
事業名	学術知共創プログラム
公募名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）
課題ID	22679495
課題名	よりよいスマートWEを目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者（上）				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	思想				
巻		掲載ページ (開始)	65	掲載ページ (終了)	85
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者（中）				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	思想				
巻		掲載ページ (開始)	143	掲載ページ (終了)	162
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者,(下)				
著者名	出口 康夫				
雑誌名	思想				
巻		掲載ページ (開始)	70	掲載ページ (終了)	92
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	有
論文課題	Can ' t Find the Time: Temporality in Madhyamaka				
著者名	Jay Garfield				
雑誌名	Philosophy East and West				
巻	73	掲載ページ (開始)	877	掲載ページ (終了)	897
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)		発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	Generative AI trial for nonviolent communication mediation					
著者名	Kato Takeshi					
雑誌名	arXiv					
巻		掲載ページ (開始)	1		掲載ページ (終了)	14
掲載論文DOI						
その他識別番号						
掲載確定		国際共著			オープン アクセス	
備考	https://arxiv.org/abs/2308.03326					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	非暴力コミュニケーションのメディエーションに向けた生成 AI の試行				
著者名	加藤 猛				
雑誌名	京都大学学術情報リポジトリ				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	10
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/284630				

【研究論文】

種別	研究論文(大学，研究機関紀要)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	WE エコノミー：道徳的責任とリスク脆弱性に基づく相互扶助分配のポテンシャル				
著者名	加藤 猛				
雑誌名	京都大学学術情報リポジトリ				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	19
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	http://hdl.handle.net/2433/286300				

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年		査読有無	有
論文課題	WE economy: Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability				
著者名	Kato Takeshi				
雑誌名	PLos ONE				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	https://doi.org/10.1371/journal.pone.0301928				

【研究論文】

種別	研究論文(その他学術会議資料等)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	WE economy: Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability				
著者名	Kato Takeshi				
雑誌名	arXiv				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	https://arxiv.org/abs/2312.06927				

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	普遍的思想史の夢の続きへ 仏教論理学研究の視点から				
著者名	護山 真也				
雑誌名	比較思想研究				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Ur-Ich as a Concept in Phenomenology				
著者名	Taguchi Shigeru				
雑誌名	Encyclopedia of Phenomenology				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	9
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	https://link.springer.com/referenceworkentry/10.1007/978-3-030-47253-5_413-2				

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	How to Become Conscious of Consciousness: A Mediation-Focused Approach				
著者名	Taguchi Shigeru				
雑誌名	Varieties of Self-Awareness: Contributions to Phenomenology				
巻		掲載ページ (開始)	193	掲載ページ (終了)	211
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考	https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-3-031-39175-0_11				

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)		発行年	2024 年		査読有無	有
論文課題	On Being Conscious as a Basic Liberty						
著者名	Tsu, Peter Shiu-Hwa and Sugimoto, Shunsuke						
雑誌名	AJOB Neuroscience, Taylor&Francis						
巻	15	掲載ページ (開始)	24	掲載ページ (終了)	26		
掲載論文DOI							
その他識別番号							
掲載確定		国際共著		オープン アクセス			
備考	https://doi.org/10.1080/21507740.2023.2292489						

【WEB】

種別	WEB	-	-
タイトル	プロジェクトHP		
URL	https://www.smart-we.bun.kyoto-u.ac.jp/		
備考			

【その他の業績】

<p>その他の業績 (自由記述欄)</p>	<p>○本事業で主催したシンポジウム等 (計6件) うち国際研究集会 計4件 We's Discussion on Self-as-We: The Advocate meets the Critics, Kyoto Univ. and Zoom, 2023. 6. 28. 第3回「ヒュームとWE」研究会、Zoom開催、参加者約10名、2023. 9. 29 第6回日立京大ラボ・京都大学シンポジウム「人とAIの＜WE＞社会 - AIが人格や道徳をもったら - 」 、東京コンベンションホール(オンライン同時開催)、2024. 1. 22 Rein Raud教授講演会 “Workshop on the World Philosophy”、京都大学文学研究科、2024.1.13. International Workshop “WE-Issue and Its Social Implications”、京都大学文学研究科、2024.2.4. Rein Raud教授招聘ワークショップ “Buddhism meets Philosophy”、京都大学文学研究科、2024.3. 21.</p> <p>著作物 (計7件) 出口康夫,『京大哲学講義 AI親友論』,徳間書店,2023.7 Yasuo Deguchi(共著),META-SCIENCE – TOWARDS A SCIENCE OF MEANING AND COMPLEX SOLUTIONS, eds Andrey Zwitter & Takuo Dome ‘FROM INCAPABILITY TO WE-TURN’ pp.41-70, University of Groni ngen Press, 2023.11.30 Garfield, J “Moral Responsiveness in Buddhist Philosophy: Buddhist Ethics and the Transfo rmation of Experience,” in Robbiano, C. and S. Flavel, eds., Key Concepts in World Philos ophies: Everything You Need to Know about Doing Cross-Cultural Philosophy. Bloomsbury. (20 23), pp. 247-256. Garfield, J “Madhyamaka, Ultimate Reality, and Ineffability” (with Graham Priest), in C Coseru (ed.), Reasons and Empty Persons: Mind, Metaphysics, and Morality: Essays in Honor of Mark Siderits. New York: Springer, pp. 247-259. (2023) Garfield, J “Between Abhinavagupta and Daya Krishna: Krishnachandra Bhattacharyya on the Problem of Other Minds,” (with Nalini Bhushan), in E. Coquereau and D. Raveh, eds., The M aking of Contemporary Indian Philosophy: Krishnachandra Bhattacharyya. London: Routledge, (2023), pp. 137-148. 猪原健弘, 入門 GMCR, 勁草書房, 288 pp., 2023年8月. 杉本俊介「人生の意味と幸福」、森岡正博・蔵田伸雄(編)『人生の意味の哲学入門』(第五章)1 03-125頁、春秋社、2023年12月20日、303頁。</p>
---------------------------	--

研究成果報告

年度	2024 年度
配分機関名	独立行政法人日本学術振興会
制度名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
事業名	学術知共創プログラム
公募名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）
課題ID	22679495
課題名	よりよいスマートWEを目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability				
著者名	Kato T.				
雑誌名	PloS ONE				
巻	19	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	23
掲載論文DOI	https://doi.org/10.1371/journal.pone.0301928				
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)		発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	Wealth inequality and utility: Effect evaluation of redistribution and consumption morals using macro-econophysical coupled approach					
著者名	Takeshi Kato, Yosuke Tanabe, Mohammad Rezoanul Hoque					
雑誌名	arXiv					
巻	-	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	27	
掲載論文DOI	https://doi.org/10.48550/arXiv.2405.13341					
その他識別番号						
掲載確定		国際共著		オープン アクセス		
備考						

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	WE協同企業体の構想-モンドラゴンから WE ターンへ-				
著者名	加藤猛、出口康夫、広井良典				
雑誌名	京都大学学術情報リポジトリ				
巻	-	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	25
掲載論文DOI	http://hdl.handle.net/2433/290881				
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学, 研究機関紀要)	発行年	2025 年	査読有無	無
論文課題	「委員会の論理」から「WEの論理」へ-資本主義のオルタナティブとしての協同プラットフォーム-				
著者名	加藤 猛				
雑誌名	京都大学学術情報リポジトリ				
巻	-	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	8
掲載論文DOI	http://hdl.handle.net/2433/292251				
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2025 年	査読有無	有
論文課題	「信頼できるAI」をめぐる論争のこれまでとこれから				
著者名	高萩智也				
雑誌名	国際哲学研究				
巻	-	掲載ページ (開始)	59	掲載ページ (終了)	71
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【WEB】

種別	WEB	-	-
タイトル	よりよいスマートWEを目指して HP		
URL	https://www.smart-we.bun.kyoto-u.ac.jp/		
備考			

【研究データ】

種別					
	公開	共有	非共有・非公開	期限付き公開予定	総数
管理対象データ	0件	0件	0件	0件	0件

【その他の業績】

その他の業績
(自由記述欄)

学会

1. Murakami, Yuko (Rikkyo U, Japan), "Epistemic injustice and algorithmic bias", International Conference, Trajectories of Epistemic Injustice: Local and Global Perspectives, December 7, 2024, 東京大学鉄門臨床講堂.
<https://sites.google.com/view/eiconferenceinjapan/home>
2. Sugimoto, Shunsuke, "Can Artificial Intelligence be Your Good Friend?", We's Discussion on Self-as-We, Kyoto University, June 17, 2024.
3. Sugimoto, Shunsuke, "What is 'Fairness' in Algorithmic Fairness?", The 3rd International Conference on the Ethics of Artificial Intelligence, University of Azores / Online, September 20, 2024.
4. 杉本俊介「Particularism and AI」『Smart WEe-ひと班年度末研究会』 (@慶應義塾大学、オーガナイザー：杉本俊介)、2025年3月6日。
5. Taguchi, Shigeru, Primal Subjectivity as Mediation. From a Phenomenological, Enactive, and Tanabean Perspective, International Workshop: "Self and Infinity II", April 13, 2024, 京都大学吉田キャンパス.
6. Taguchi, Shigeru, The Logic of Non-Oppositional Selfhood, The Philosophy in the We Mode : Smart-WE Workshop, September 10, 2024, Maritime Museum, Käsmu, Estonia.
7. 橋英希・白川晋太郎「大規模言語モデルと哲学者の対話的WE」『応用哲学会第16回年次研究大会』、2024年6月1日、オンライン。
8. 高萩智也「eトラスト をめぐる倫理的問題」『応用哲学会第16次年次研究大会』（ワークショップ：「ひと」と「e-ひと（e-person）」はWEを築けるか）、2024年6月、オンライン。
9. Kazuhiro Watanabe, Scientific Empiricism Gets Closer to Buddhism in the Depth of Malady and Mindfulness-Shoma Morita and David Hume, the European Network of Japanese Philosophy 8th Annual Conference, 2024. 9. 8, Tallinn University

アウトリーチ

1. 村上祐子 AI時代のメディアの可能性と課題 NHK文研フォーラム2025 2025.3.19 NHK放送文化研究所
2. 村上祐子 「生成型AIとその社会に与える影響などについて」2024年5月25日 日本アスペン研究所 クロスウェーブ府中
3. 杉本俊介「ビジネス倫理から見たデータ倫理」、MyData Japan 2024、セッション「倫理（エシックス）を乗り越え：データ時代の倫理を実装する」、一橋講堂、2024年7月17日。

主催ワークショップ

1. Ethics of WE
日時：2025年3月14日（金）
開催形式：京都大学／ハイブリッド開催
2. e-ひと班年度末研究会
日時：2025年3月6日（木）13:30-16:30
開催形式：慶應義塾大学日吉キャンパス／ハイブリッド開催